

金沢「氷室」考

竹 井 巖

Consideration on "Himuro" in Kanazawa

Iwao Takei

Received November 1, 2010

Abstract

Manners and customs of the day of "Himuro" (the first day in July) in Kanazawa and relations with those and the ice (snow) presentation of the "Kaga-Maeda" feudal lord to the "Shogun-Tokugawa" in Edo were discussed. Those manners/customs in Kanazawa come from an event of the ice-celebration for the feudal lord in the first day of June (of the lunar calendar) and nationwide customs of "Hagatame" in the same day. Relevance between the manners/customs in Kanazawa and the ice (snow) offering to "Shogun" in Edo is not strong. The meaning of the ice (snow) offering was discussed with a "courtnoble-ice and samurai-snow" hypothesis. Historical materials about the "Kaga" feudal affairs cannot confirm a description about the ice offering. As for the cause, it is thought that it was not publicized the ice (snow) offering to "Shogun" in hometown Kanazawa generally, because (1) its snow offering means open obedience to "Shogun", and (2) it is possible that snow transportation for the snow offering used a secret way of "Kaga" feudal clan.

金沢の氷室の日の風習と、加賀藩の将軍家への氷（雪）献上の関係が論じられた。金沢のこの風習は、藩主に対する六月朔日の祝いの氷の行事に由来するものと、全国的な六月朔日「ハガタメ」の風習に由来するものの二通りがある。金沢の風習と将軍家への氷（雪）献上との関連性は強くない。氷（雪）献上の意味が「公家の氷、武家の雪」仮説を用いて論じられた。藩政史料などに氷（雪）献上に関する記述が確認できないのは、①雪献上が将軍家へのあからさまな臣従を意味すること、②雪献上のための雪運搬が藩の隠し道を利用した可能性があることなどから、地元金沢では一般に周知されてなかったためと考えられる。

keywords

氷室、氷室の日、氷献上、雪献上、氷室万頭、雪氷利用、加賀様の隠し道

1. はじめに

金沢では、7月1日を氷室の日と呼び、さまざまな行事が行われる¹⁾。食べると無病息災になるとして、氷室まんじゅうを買い求めて親戚や知人に贈答し、家庭ではもちろん学校給食でも行事食としてそろって食べたりする。また、金沢の奥座敷である湯涌温泉の氷室から取り出された貯蔵雪が、この日に市長や知事へ献上される。能や謡曲の催しも行われることもある。以前には、炒り米、炒り豆、かきもちを食べたり、ちくわの煮しめやあんずなどを子どもたちが持ち寄ってままごとあそびをする風習もあったという。このような氷室の日の金沢における風習・諸行事は、ひとつには藩政期の旧暦六月朔日に藩侯が氷室の氷雪を召し上げる行事²⁾に由来するとされる。

旧暦六月朔日は、江戸では氷室御祝儀（賜氷の節）とよばれ、加賀藩邸の氷室から將軍家に氷献上が行われる日とされた³⁾。献上されたのは、氷と記述されながらも実際は雪であった⁴⁾。この加賀藩からの氷（雪）献上は、江戸の庶民には風物詩としてなじみのあったもののようで、「六つの花五つの花の御献上」（六つの花＝雪、五つの花＝加賀藩前田家）と川柳でも詠まれている⁵⁾。この氷（雪）献上は、前田家に仕えていた古老の話として加賀藩第三代前田利常の寛永年間に始まり徳川十四代家茂の頃まで年々行われた、と大正期の文献⁶⁾に見られる。しかし、加賀藩の藩政史料では確認できず、その実態は明確ではない。この加賀藩による氷（雪）献上については、多くの著述家の言及する関心の高い事柄ではあるが、研究対象として公刊された文献はそう多くない^{7) -10)}。

この小論では、金沢の氷室の日にかかわる風習・諸行事を概観するとともに、それと加賀藩による氷（雪）献上との関係を地元金沢の視点から論考する。

2. 金沢における氷室の日の風習

【氷室の日の風習の分類】 金沢の氷室の日に行われていた風習は、平成13年（2001）の『金沢市史資料編14民俗』¹⁾や昭和17年（1942）の『加能郷土辞彙』¹¹⁾などに詳しく述べられている。分類整理して示すと

- [1] 氷室万頭、麦饅頭
- [2] ちくわの煮物、きゅうりなます、あんず、ままごと（おじやごと）
- [3] 煎り菓子、炒り米、炒り豆、かきもち
- [4] 氷室の朔日の民間の祝いの氷、白山氷、がぼり
- [5] 氷室の朔日の藩主への祝いの氷、臣下への賜与
- [6] 加賀藩から將軍家への氷（雪）献上
- [7] 謡曲、能の催し
- [8] 高源寺のお灸、ヒムロマツリ

といったもの（他に [9]）氷餅）が代表的に挙げられる。このような風習の記述を、さまざまな時代について概観して示すと、表1のようになる。

表1 金沢における氷室の日の風習記載記事の年表と記載内容の内訳

年代	史料名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	備考
貞享元年（1684）	改作所旧記 ³²⁾					○					
享保17年（1732）	料理方故実伝略 ¹²⁾			○						○	舟木伝内
安永4年（1775）	五節句集解 ¹²⁾			○	○	○				○	舟木長左衛門
文化－天保期	鶴村日記 ¹³⁾	○		○	○	○		○			金子鶴村
慶応4年頃	昔の十二月月 ¹⁴⁾	○		○	○			○			南部祇知
明治24年（1891）	金澤古蹟志 ²⁾					○					森田平次
大正13年（1924）	金沢市紀要 ¹⁷⁾	○			○		○				金澤市役所編纂
大正14年（1925）	金澤叢語 ²⁰⁾	○			○	○	○				和田文次郎
昭和2年（1927）	稿本金澤市史 ²¹⁾	○		○	○	○	○				和田文次郎編纂
昭和8年（1933）	金澤新風景 ²²⁾						○				鴨居悠
昭和17年（1942）	加能郷土辞彙 ¹¹⁾	○		○	○	○	○	○	○		日置謙
昭和29年（1954）	郷土の年中行事 ²³⁾	○	○	○	○	○	○	○	○		長岡博男
昭和34年（1963）	百万石紙芝居 ²⁴⁾	○		○	○	○	○	○		○	八田健一
昭和44年（1969）	金沢市史現代篇 ²⁵⁾	○	○	○	○		○	○			今村充夫
昭和45年（1970）	年中行事調査 ²⁶⁾	○	○	○					○		金沢大学郷土史研究会
昭和45年（1970）	生菓子屋読本 ¹⁸⁾	○	○	○	○	○	○				金沢生菓子専門店会
昭和45年（1970）	石川県の歴史 ²⁷⁾	○		○	○	○	○				下出積興
昭和46年（1971）	金沢味の四季 ²⁸⁾	○	○	○			○				千代芳子
昭和49年（1969）	日本の民族17石川 ²⁹⁾	○	○	○	○		○	○			小倉学
昭和50年（1970）	加賀能登の生活と民俗 ²³⁾	○	○	○	○		○	○	○		長岡博男
昭和53年（1978）	金沢の風習 ¹⁹⁾	○	○		○		○	○			井上雪
昭和53年（1978）	生きている民俗探訪 ²⁵⁾	○	○	○	○		○	○	○		今村充夫
平成元年（1988）	金沢市史現代編続編 ³⁰⁾	○		○	○		○	○			金沢市史編さん委員会
平成3年（1991）	金沢・伝統・再生 ³¹⁾	○		○	○		○	○			島田昌彦
平成5年（2003）	石川県大百科事典 ²⁹⁾	○		○	○		○				小倉学、千代芳子
平成13年（2001）	金沢市史資料編14民俗 ¹⁾	○	○	○	○		○	○			金沢市史編さん委員会
平成16年（2004）	書府太郎 ²⁹⁾	○		○	○		○				小倉学、千代芳子

[1] 氷室万頭、麦饅頭

[2] ちくわ、あんず、きゅうりなます、ままごと（おじやごと）

[3] 煎り菓子、炒り米、炒り豆、かきもち

[4] 氷室の朔日の民間の祝いの氷、白山氷、がぼり

[5] 氷室の朔日の藩主への祝いの氷、臣下への賜与

[6] 加賀藩から將軍家への氷（雪）献上

[7] 謡曲、能の催し

[8] 高源寺のお灸、ヒムロマツリ

[9] 氷餅

『加賀藩料理人舟木伝内編著集』¹²⁾に所載される、安永4年(1775)の『五節句集解』に「六月朔日氷室之事」として、朝廷の氷室の由来や公方の富士山の雪の記述の後で、加賀藩では江戸と金沢に氷室で雪を貯えていたこと[5]、百姓が金沢の犀川橋で雪を売り出していたこと[4]、小麦小豆を煎って喰したこと[3]、煎りものの上には奥州二本松の氷餅[9]を置いたことなどが述べられている。加賀藩家老今枝家に出入りした儒学者金子鶴村の文化-天保年間(1805-1837)の日記『鶴村日記』¹³⁾にも、六月朔日には、祝いの氷[4][5]や煎りもの[3]、能謡曲[7]に関する記述が見える¹⁾。江戸時代末期の『昔の十二ヶ月』¹⁴⁾には、六月朔日を氷室の朔日と呼び、行事食としては、氷売りの氷[4]、炒り米、寒の餅のあられ[3]、麦まんぢう[1]が食べられ、また、宮・寺・料亭での謡曲(「氷室」など)の催し[7]が記述されている。このように、金沢の氷室の日の風習には、朝廷の氷室の貢氷^{12)・15)・16)}に遡ると考えられる氷(雪)を用いる行事[4][5][6][7]と、東北・北陸・山陰に分布する旧暦六月朔日の風習¹⁶⁾「イリガシボン」「ハガタメ」との関連で炒り米・炒り豆・寒餅を食べる行事[3][9]の大きく二通りの由来が考えられそうである。

【分類整理から判明したこと】 まえがきに述べたように將軍家に対する加賀藩の氷(雪)献上の記述は藩政文書では確認されていないが、この表1をみると、氷(雪)献上のことが氷室の日の風習に関連して地元金沢で記述されるようになるのは、大正13年の『金沢市紀要』¹⁷⁾あたりからであることがわかる。

金沢の氷室の日に欠かせないものに、氷室万頭がある。現在の氷室万頭は甘い餡の普通の蒸し饅頭であるが、大正期に広く普及し始めた頃は塩餡の麦饅頭だったという¹⁾。この六月朔日氷室万頭の起源は、金沢の老舗生菓子屋の五代堂後屋三郎右衛門であり郷土史家であった水島完爾氏によると¹⁸⁾、五代藩主前田綱紀公の享保年間(1716-1724)に片町の生菓子屋道願屋彦兵衛が創案したものとされる。冬に雪の下で過ごした麦を用い、「饅頭」の代わりに「万頭」の字を使って「氷室万頭」として売り出し、夏負けしない縁起もの(萬の頭になるという意味)として氷室の日の贈答品として受け入れられたという。この氷室万頭は、無病息災を願って氷室の日に食べる行事食として現代に引き継がれてきた。しかし、將軍家への氷(雪)献上との関連で語られるようになるのは意外に新しく、昭和53年の井上雪『金沢の風習』¹⁹⁾における和菓子屋のご主人からの聞き書き(「氷が無事に届くよう饅頭を供えて神社に祈願」)が、初出となる。

3. 藩主への祝いの氷と山の民

【藩主への祝いの氷】 金沢における旧暦六月朔日の祝いの氷に関する記述が最初に認められるのは、万治元年(1658)から享保7年(1722)までの藩政文書を編纂した『改作所舊記』中の、倉谷四ヶ村の献氷関連文書^{32)・33)}においてである。

これらの文書によると、貞享元年(1684)六月朔日に、倉谷四ヶ村(日尾、見定、倉谷、二又)より吉例のお祝いの氷が二荷ほど金沢城二の丸御臺所に運ばれている。これは、六月朔日の祝いの氷(雪)の藩主への運搬が、貞享元年の時点で行われていた事実を示す初出の証拠である。この氷運搬には、後日氷持参人足10人に2貫文、肝煎4人に2貫文が渡されている。元禄5年(1692)に金沢城玉泉院丸に氷室が設置された後には、倉谷からの恒例の氷運搬は行わ

れなくなるが、元禄11年（1698）には、城内の氷室に御祝御用の氷が残らなかったため、六月朔日の朝六時に御廣式まで氷を持参するようにと通達がなされ、倉谷村より氷一荷が運ばれて二貫文が渡されている。元禄13年（1700）にも依頼されて氷二荷を運搬しているが、この年より人足頭割りでの日用銀が渡されることになる。

ところで、元禄15年（1702）の倉谷四ヶ村の肝煎による祝いの氷の由来に関する申上書では「倉谷四ヶ村之儀者、御陣屋之杣役相勤申候。（略）為御褒美天正十二年五月より諸役御免之御判之物、高德院様より頂戴仕申候。右為冥加其頃より六月朔日氷上申候。微妙院様より寛永十三年十一月右御同事之御判物被為下。（略）氷之儀者、御代々打続差上申候。（略）元禄五年迄差上申候。」³²⁾（倉谷四ヶ村の者が軍の陣屋の設営に杣役として働いたので、（略）前田利家から天正12年（1584）5月に諸役御免の書き付けをもらった。その礼として六月朔日の氷を献上した。寛永13年（1636）にも前田利常から同様の書き付けをもらった。（略）氷の献上は代々献上し（略）元禄5年（1692）まで行った。）とある。元禄16年（1703）の倉谷・二又の肝煎による申上書にも、「氷上げ始申年號者、大納言様御代天正十二年五月十日に、諸役御免之御印頂戴仕候に付、為御禮同年六月朔日氷差上申候處、如何之儀に而氷献上仕候哉と御尋御座候故、今日之御祝に指上申旨御請仕、夫より毎年上げ来候由承傳申候。（後略）」³²⁾と同様の記載がある。これらの内容から、倉谷四ヶ村からの六月朔日の藩主への献氷が天正12年（1584）までに遡る可能性を示していること、以降継続して祝いの氷の献上を元禄5年（1692）まで行ってきたこと、元禄6年以降は基本的に祝いの氷を城内の氷室で賄うようになったことなどが読み取れる。倉谷四ヶ村からの藩主に対する祝いの氷献上は、当初、諸役御免のお礼として行われたが、城内に氷室が設置される前後の時期には搬入した氷に対する対価を受け取る形になっており、元禄13年（1700）には氷搬入の手間賃にと減額されて、村民と藩とのトラブルになる³²⁾。このことから、時代の経過とともに六月朔日の祝いの氷に関する倉谷の役割・待遇の変化が読み取れる。

【倉谷四ヶ村と山の民】 この倉谷とは、白山山系に連なる山々を源流とする犀川上流に位置し、慶長13年（1608）に起源を持つ金山銀山として、利常の時代（元和・寛永年間（1615－1643））に少なからぬ金銀を産出し、最盛期には400軒の大集落を成して、寺社や遊郭が設けられた場所である^{33) -34)}。元禄期の文書³²⁾にあるように、倉谷四ヶ村は陣屋の杣役として軍役に参加し、諸役御免の扱いを受けるなど藩から特別な扱いを受けていた。前田利家が金沢入城する前のことであるが、加賀を支配していた佐久間玄蕃は、倉谷四ヶ村の日尾・見定の者が意のままにならないことから屈強な村人300人を騙して城の堀普請で呼び寄せ、全員を殺害して山内を治めたとの逸話がある^{33) -35)}。また、時代が下って村自体が衰退した時期においても、倉谷では新春の賀において軍役の心構えを村長が述べ、斧一挺と山刀一挺を新しく研ぎ立て、軍役の用に備えていたとの記述さえある^{33) -35)}。

この倉谷も、鉱山開発で荒れた山になっていたのであろうか、洪水で集落が悉く流出した時、二又の近くに再び町家200軒を建てたこともある³⁶⁾。坑道が水没して金銀産出が困難になった時期（寛文8年（1668）頃）³⁶⁾から、倉谷集落は廃れ始め、寺社も金沢に移転するようになる。延宝8年（1680）には家数25軒ほどに減り³⁴⁾、天和2年（1682）には村全体の火事で難民化して近隣の村に流浪したこともある^{32) -33)}。貞享元年（1684）の藩主への倉谷四ヶ村の献氷の記述は、倉谷が衰亡しつつある時期に現れてきたものである。

ここで注意したいことは、加賀藩で献氷を担ったのは農民百姓ではなく、杣人や鉱山従事者などの山の民であった事である。このような倉谷四ヶ村の祝いの氷の献上について、ふたつ疑問が生じる。一つは、もし利家入城に献氷の時期が遡れるとすると、この六月朔日の祝いの氷の起源はどこから来ているのかということである。山の民の素朴な思いつきというより、その歴史・文化的背景があったはずである。京都とのつながりが深かった初期加賀藩が、この献氷行事を積極的に取り入れたであろうことは疑いない。もう一つの疑問は、この倉谷四ヶ村の加賀藩における役割は何であったかということである。この倉谷四ヶ村は、陣屋杣役として関東陣・唐陣・大阪陣などの軍役³⁶⁾にも参陣して利常から諸役御免の特別扱いを受け、実際に年貢の取り立てなどからも除外されていたことが確認できる³³⁾。軍役や金銀山の大規模集落、祝いの氷の運搬など、初期加賀藩の特殊な活動部分の役割を担っていた山間集落のように思える。

[氷室の日の祝いの氷の行事] 元禄5年(1692)に金沢城玉泉院丸の露地(庭)に氷室小屋が設けられ、藩主用の貯蔵雪が城内で賄われるようになる^{2) .32) -33)}。城内玉泉院丸での氷室では、戸室石で造った二間四間の穴蔵に、清浄な雪を箱に詰めて設置し、その廻りを雪で覆って貯蔵した^{2) .8)}。この貯蔵雪は、六月朔日に藩主が召し上がり、また群臣に賜与したとされる^{8) .11)}。藩政期の金沢における城中での恒例行事であったと見られる。藩政後期には、金沢では民間でも六月朔日の祝いの氷を入手し、氷室の日の金沢を特徴付ける雪氷利用の風習となっていく^{8) .12) -13)}。役割を終えた倉谷四ヶ村の祝いの氷運搬は、後の犀川橋付近での民間の雪売り¹²⁾につながったのかもしれない。

さて、この氷(雪)を用いた氷室の日の藩侯の行事は、金沢城でのみ行われていたのだろうか。江戸時代の三代将軍家光の時代に参勤交代の制度が始まり、江戸と地元を一年ごとに滞在する制度の中で、前田家の当主が六月朔日の氷室の日の行事を、江戸藩邸ではどのようにしたのか興味深いものがある。江戸藩邸でも祝いの氷(雪)を用いる行事を行ったとすれば、金沢から雪を六月朔日に間に合うように運ぶという方法も選択肢の一つとしてあったと思われる。江戸時代後期に加賀藩邸に氷室があったことは明らかであるが^{3) .12) .37)}、設けられた目的のひとつには、金沢城における六月朔日の行事を江戸藩邸でも実施するためであった可能性が高い。このことは、雪を貯蔵する施設を氷室と称したことからも支持される。

4. 将軍家への氷(雪)献上

江戸時代末期には、加賀藩の氷(雪)献上が六月朔日の行事としてよく知られるようになる。しかし、加賀藩政関連史料にはこの氷(雪)献上に関する文書が確認されていない。ここでは、加賀藩の氷(雪)献上について、地元金沢と江戸東京においてそれぞれ文献の上でどの程度遡れるか示すことにする。(表2)

[金沢から見た氷(雪)献上] 加賀藩の将軍家への氷(雪)献上について、地元金沢の文献を遡って確認できる初期の記述は、大正13年(1924)の金沢市役所編纂『金沢市紀要』¹⁷⁾における「年中行事(略)六月は一日を氷室と称えた、此日藩主から幕府へ氷を献上した、當時江戸では競ふて伝手を求め此献上氷の餘分を貰ひ受けたといふ」である。大正14年(1925)の和田文次郎『金沢叢語』²⁰⁾に「石川郡倉谷山の氷雪を江戸の本邸に贈り徳川幕府へ献納してゐた」との記述もある。昭和17年(1942)の日置謙『加能郷土辞彙』¹¹⁾には「氷室の朔日

表2 加賀藩から将軍家への水(雪)献上関連記事の年表

年代	史料名	貯雪場所	運搬	献上	記事
安永4年(1775)	五節句集解 ²⁾	江戸藩邸			公方様には富士山より被為召。御家にては江戸金沢にては御庭の内に被仰付毎年貯申也。
寛政11年(1799)	ひとつもと草 ³⁸⁾	加賀藩本郷邸	×	○	加賀の国の守なん、かならず水無月のついたちに、公に奉れる(略)その(雪の)つくれる所は、このちかきわたり本郷てふ館のうちなり(略)山の井のさまじましたるほらまをまうけ(略)芝の上に雪の降り、ば(略)箱二つをいれをきこの中にまじし雪をば公に奉れる料と定め(後略)
文化1年(1804)	増補江戸年中行事 ³⁷⁾	加州様御屋敷			六月朔日加州様御屋敷内に氷室の雪あり
文化8年(1811)	柳多留五十八 ⁵⁾ 、 ⁴⁰⁾			○	六つの花五つの花の御献上
天保元年(1830)	難波江 ⁴⁶⁾			○	毎月六月初日加賀候より氷献上のよし人みないふ事也
天保9年(1838)	東都歳時記 ³⁾	加州候御藩邸		○	六月初日氷室御祝儀賜水の節加州候御藩邸に氷室ありて今日氷献上あり
明治25年(1892)	定本江戸城大輿 ⁴⁾			○	加州家より氷室の献上あり。(略)また氷とは申せ、是は雪塊にて、土中に埋め置き物なればにや、土芥などの打ち雜りて願る清からず。
明治41年(1908)	明治事物起原 ⁴¹⁾	加賀藩駒込邸		○	駒込の氷室に開ひおける水塊を、将軍家に献上するにて、其余り分を、通行人に施すを例としたりければ、態々加州邸に往きて、其恵に与らんとする者多く
明治44年(1911)	東京年中行事 ⁴²⁾	加賀藩本郷邸	○	○	加州候は今の大学構内にある富士山の形をした山の中に、わざわざお国から取り寄せて開ておいた雪を取り出して、毎年六月初日に幕府に献上した
大正9年(1920)	江戸から東京へ ⁴³⁾	加賀藩本郷邸	?	○	大きな霰を掘り、桶の箱へ献上の雪をつめて貯蔵せる周囲をまた数万坪の雪で密封して春をすごし、陰曆七月の土用過ぎなかに穴をひらき、周囲の雪を除けて、箱入りの雪を将軍家に献ずる
大正13年(1924)	金沢市紀要 ¹⁷⁾			○	六月は一日を氷室と稱えた、此日藩主から幕府へ水を献上した。當時江戸では競ふて傳手を求め此献上水の餘り分を買ひ受けたといふ。
大正14年(1925)	金澤叢語 ²⁰⁾	石川郡倉谷	○	○	毎年藩主前田氏より石川郡倉谷山の氷雪を江戸の本邸に贈り徳川幕府へ献納してゐた
大正15年(1926)	冷凍 ⁶⁾	金沢城二の丸	○	○	百万石の大名加賀前田候が毎年六月一日に徳川幕府へ水を献上(略)この献水は寛永年間前田三代の主利常候に初まり徳川十四代家茂公頃迄年々行われた(略)金沢城二の丸に二間四間の穴蔵が造られ冬季当番の足軽(手木足軽)が毎日雪を其穴蔵に詰め込み貯蔵したもので献水の際には金澤から江戸迄の長い道中を長持の中に木の葉や笹を以て水を詰め足軽が運んだ
大正15年(1926)	冷凍 ⁶⁾	加賀藩本郷邸	○	○	後には今の本郷帝大敷地内(元前田公敷地)に氷室を造り冬の間に金澤から水を運んで貯蔵して置き献上するようになった
昭和2年(1927)	稿本金沢市史 ²¹⁾	二又・倉谷	○	○	この日、藩主前田家にては、江戸の本邸より幕府徳川家へ水を献ずるの例にして、その氷は、石川郡二又・倉谷の雪を氷室に貯へ置けり、當時江戸市中といえども、氷を得ること容易ならざれば、前田氏よりの献上水の残れるを獲れば、一片の水をも珍重せりといふ。
昭和17年(1942)	加能郷土辞彙 ¹¹⁾	金沢	○	○	藩政の時六月初日を氷室の日といひ、江戸邸から水を将軍に献上した。この氷は、金沢において貯蔵したものを二重の桐長持ちに容れ、八枚肩の脚夫によって江戸に急送したのである。
昭和34年(1959)	百万石紙芝居 ²⁴⁾	倉谷四ヶ村	○	○	加賀藩邸から徳川将軍へ氷室の水を献上する恒例があった。その氷は犀川の上流倉谷・二又・日尾・見定四ヶ村の渓谷に貯えたもので、(略)城ではこの氷を二重造りの桐の長持におさめ、八枚肩の脚夫によって下街道を江戸へ急送したものである。(後略)

藩政の時六月朔日を氷室の朔日といひ、江戸邸から氷を將軍に献上した。この氷は、金沢に於いて貯蔵したものを二重の桐長持に容れ、八枚肩の脚夫によって江戸に急送したのである。藩侯も亦氷を喫し、近臣にも之を賜与した。」とある。(表2)

地元金沢の文献では、江戸藩邸から將軍への氷献上や、そのために雪を江戸に運んだという記述が、大正13年以前には確認できない。明治時代に加賀藩の藩政文書を依頼されて整理した森田平次の『金沢古跡誌』²⁾にある金沢城の氷室に関する言及には、六月朔日の藩侯が召し上がる氷雪については触れてあるが、將軍家への献上には言及がない。藩政期の金沢の氷室の日の祝いの氷に言及している『五節句集解』¹²⁾や『鶴村日記』¹³⁾、『昔の十二月月』¹⁴⁾にも触れられてない。あまり地元民には周知されていなかった事柄なのであろうか。金沢の氷室の日の風習が、地元金沢では將軍家への氷(雪)献上に必ずしも結びつけられていなかったようにみえる。

[江戸東京から見た氷(雪)献上] 一方、江戸東京では、加賀藩から將軍家への氷(雪)献上に触れた記述は、少なからず散見され、斉藤月岑による天保九年(1838)『東都歳時記』³⁾の「六月朔日 氷室御祝儀(賜水の節)加州候御藩邸に氷室ありて今日氷献上あり」はよく知られている。寛政11年(1799)の太田南畝編『ひともと草』³⁸⁾における中神守節のかな書き文『氷室』には、加賀藩本郷邸の築山に穴を設け、そこに冬に降った雪を箱に詰めて納め廻りに雪を重ね上げて保存し、公(將軍)へ六月朔日に献上したとの内容の記述がある。寛政12年(1800)の川柳集『柳多留二九』³⁹⁾にある「梅壺を出る六月の御献上」も加賀藩の氷(雪)献上を表していると思われる。この他⁴⁰⁾、「梅の室から雪の出る暑いこと」(柳多留三六(文化4年(1807)))「水無月に梅に積もった雪が散り」(三八(文化4年))「心ざし水にせぬうち御裾分け」(三八)「梅の雪極暑に成りて御目にふれ」(四五(文化5年))「六つの花五つの花の御献上」(五八(文化8年))などの川柳が見られるので、1800年前後が確実に遡れる加賀藩氷(雪)献上に関する初期の文献記述と思われる。

加賀藩江戸藩邸の氷室の存在は、安永4年(1775)の『五節句集解』¹²⁾の記述から疑いない事であるが、前述の寛政11年(1799)『ひともと草』³⁷⁾の記述や、文化1年(1804)『増補江戸年中行事』³⁷⁾(六月朔日の項に「氷室のご祝儀」と「加州様御屋敷内に氷室の雪あり」)などの記述は、この氷室が雪を貯蔵するための施設であったことを明示している。明治41年(1908)の石井研堂『明治事物起源』⁴¹⁾には、「江戸年中行事六月一日加州候の雪献上の事あり。駒込の氷室に囲いおける氷塊を、將軍家に献上するにて、其余り分を、通行人に施す例としたりければ、態々加州邸に往きて、其恵に与らんとする者も多く、婦女幼童のよく暗記せる日なりしといふ。」とあり、この場合は、駒込の加賀藩中屋敷に氷室があったとする記述になっている。しかし、明治44年(1911)の春陽堂『東京年中行事』⁴²⁾には、「加州候は今の大学構内にある富士山の形をした山の中に、わざわざお国から取り寄せて囲って置いた雪を取り出して、毎年六月朔日に幕府に献上した」とあるように、金沢から運んだ雪を本郷の藩邸の氷室に貯えたとの記述もある。金沢出身の矢田挿雲が報知新聞で大正9年(1920)より掲載した『江戸から東京へ』⁴³⁾の記事の中に、「各分科大学の建っている辺りの空き地に大きな罎(あなぐら)を掘り、桐の箱へ献上の雪をつめて貯蔵せる周囲を、また数万坪の雪で密封して春をすごし、陰曆七月の土用のさなかに穴をひらき、周囲の雪を除けて、箱の雪を將軍家に献ずる」とある。ここでは本郷の藩邸に積った雪を用いて献上の雪を貯蔵した内容になっている。江戸

の加賀藩邸では、金沢から雪を運んだばかりでなく、本郷の上屋敷や駒込の中屋敷にも氷室を設けて、冬季に積った雪を貯蔵していたことが窺える。

[金沢からの雪運搬の有無] 献上に用いた雪は、金沢から運んできた貴重な雪であろうか、それとも江戸の冬に降り積った雪を貯蔵したものなのであろうか。和泉ら¹⁰⁾は気候学的な観点からと上述した文献³⁸⁾などを論拠に、加賀藩は江戸に降った雪を貯蔵して氷(雪)献上に用いた、と主張している。上述の疑問に対する解答のひとつに、大正15年(1926)の天野論文⁶⁾に引用されている前田家に仕えていた古老の話がある。ここでは將軍家への氷献上が「寛永年間前田三代の主利常公に初まり徳川十四代家茂公頃迄年々行われた」とし、「金沢城二の丸に二間四間の穴蔵が造られ冬季当番の足軽(手木足軽)が毎日雪を其穴蔵に詰め込み貯蔵したもので献氷の際には金沢から江戸迄の長い道中を長持ちの中に木の葉や笹の葉を以て氷を詰め足軽が擔て運んだ」とあり、献氷のために金沢から江戸へ雪を夏に運んだことが述べられている。ところが、「今から思えば随分御苦勞な事」とであると感想を述べた後、「後には今の本郷帝大敷地内(元前田侯敷地)に氷室を造り冬の間に金沢から氷を運んで貯蔵して置き献上する様になった」とある。時の経過とともに、本郷加賀藩上屋敷に氷室を設置して冬期間に金沢から氷を運び、氷献上に用いることになったとの変化が述べられている。国元金沢の貴重な雪というイメージがこの聞き書きには現れている。上述の引用文献³⁸⁾、⁴¹⁾、⁴³⁾にあるように、江戸に降る雪を宏大な駒込の中屋敷や本郷の本邸において氷室にかき集めたことは事実のようでるので、その雪が献上に用いられた可能性はある。しかし、貴重な国元金沢の雪を冬期間に運搬したとすれば、この献上用の雪を江戸の雪で保冷して献上した可能性もある。いずれにしても、夏に金沢から江戸に雪を運んだとすれば、特別な事情が無い限り江戸藩邸における雪氷利用(藩主の祝いの氷行事、氷(雪)献上など)の初期の時代の事であろう。

[雪氷利用の変化] 江戸期の大名家の雪氷利用の一例として、田口の『氷の文化史』⁷⁾には、安永2年(1773)に加賀藩で大名の接待に客間全体を氷を使って冷房し、氷菓子を振る舞った話が紹介されている。これは『加賀藩御納戸日記』に「客殿の冷装」という記述があるようで、部屋全体を雪で冷房した日本で初めての事例ではないかとされる⁴⁴⁾。この安永2年(1773)には、11代藩主治脩の家督相続の祝いに、労を取ってくれた幕府の老中たちを5月18日の暑い時期に加賀藩邸に招いたという史実(「客殿の冷装」には触れてないが)がある⁴⁵⁾。部屋を冷房するためには、多量の雪氷が必要なはずなので、前述にあるように宏大な藩邸に冬季積もった雪を集めて氷室または穴蔵に貯蔵したとすれば、十分可能な話である。時代とともに、夏場の雪の貴重さの程度も変わったということなのかもしれない。

雪献上に関係した雪氷利用の記述では、天保元年(1830)の岡本保孝『難波江』⁴⁶⁾の中に「氷献上 毎年六月朔日加賀侯より氷献上のよし人みないう事也。掖齋氏のいわるゝには、氷を奉るにはあらず此時鮮鯛を奉ることあるに、その魚を損ぜぬ為に添へて奉る也といへり」とある。このことは、二つの意味で興味深い。一つは、夏の魚の冷蔵に氷(雪)を用いたという事例(大名家による献上という特殊な雪氷利用ではあるが)を、この時期の人々には不思議なことは考えなくなっていたらしいということ。もうひとつは、氷(雪)献上が加賀藩のなにかの雪氷利用をきっかけ(起源)に行われるようになった可能性を示していることである。徳川封建体制における外様大名の筆頭として、また三代利常以降婚姻によって徳川家との親戚関係を深めていく加賀藩前田家にとって、氷(雪)献上のきっかけや、それを行う加賀藩として

の合理的な理由が存在したはずなのである。

5. 雪献上の意味するところ

金沢における氷室の日の由来を考える上で、なぜ加賀藩主が六月朔日の祝いの氷の行事を行うようになり、将軍家への氷（雪）献上を行うようになったのかを明らかにする必要がある。
【江戸時代の六月朔日の認識】 年中行事としての六月朔日の意味については、歴史的には、宮中の賜氷の節に由来するとの記述が貞享二年（1685）の黒川道祐『日次紀事』⁴⁷⁾に現れる。この記述は「六月初一日 節序 賜氷節 昔日今日、自丹波或処々氷室 献氷於 禁裏。或賜群臣。」とあり、宮中では六月朔日に丹波などの官営氷室から氷が献じられ、氷は群臣に下賜されたとする内容になっている。また、武家の行事として『東鑑（吾妻鏡）』⁴⁸⁾の建長三年六月の富士の雪を取り寄せる関連の記述も引用されている。同書⁴⁷⁾では、この日に（宮中の）大飯寮から氷餅が供されているので、民間ではかき餅を氷の代わりとして食するようになった、との記述もある。この宮中の貢氷・賜氷にかかわる江戸時代初期の記述は、加賀藩の祝いの氷行事の由来を考える上でも、また金沢を含めて全国の六月朔日に「ハガタメ」と称して煎り菓子やかき餅を食する風習に関連するものとしても、大変興味深い。（都祁氷室を初めとする官営氷室の献氷関係の研究者である川村和正氏（私信）⁴⁹⁾によると、中世の公家や寺社関連文書には、六月朔日の貢氷や（氷）餅の記述はわずかにしか散見されないが、近世に入ると宮中や武家の文書に六月朔日の氷餅記述が多く見られるという。ただ、貢氷や氷餅と宮中行事との関連は必ずしも明確ではないそうである。）

【公家の氷と武家の雪】 『日本書紀』¹⁵⁾を初めとして、朝廷での官営氷室の氷の古くからの利用はよく知られている^{7) -8)}。鎌倉時代の順徳天皇から龜山天皇の時期（1210-1274）に成立したとされる『年中行事抄』⁵⁰⁾には、六月朔日の宮中の行事として「官厨家分氷於執柄家以下公卿并官外記事」とあり、官厨家（貢物を扱う部署）から執柄家（関白執権を任じられる家格）以下の公卿に氷が分頒されたことがみえる。

さて一方で、武家の行事として注目されるのは、鎌倉幕府の政務を記述した『吾妻鏡』⁴⁸⁾における建長3年（1251）6月5日の富士山の貢雪の記事である。「六月 五日 甲午 天曇る。評定あり。（中略）また炎暑の節に当たりては、富士山の雪を召し寄せ、珍物の備えとなすところなり。（當炎暑節者、召寄富士山之雪。所為備珍物也。）」のように、富士山の雪が鎌倉幕府の夏の行事に重要な位置づけを占めていたことが示唆される。これに関連して、その60年前の建久2年（1191）2月17日条⁴⁸⁾には、「雪降り、地に積りて五寸、（中略）、六辺香（山辺の雪）を取りて、長櫃に納れ堅者坊に送り遣はさる。彼（の所は）山陰に属し、日脚相隔る。よって氷室を構え、炎暑を消すべきの由、仰せらる。此の次いでを以て、当參の諸人、白雪を運び送ると（云云）。（取六邊香、納長櫃被送遣堅者坊、彼屬山陰、日脚相隔。仍構氷室、可消炎暑之由、被仰。以此次、當參諸人、運送白雪（云云）」のように、源頼朝によって夏に用いるための雪を貯える氷室が設置されるようになったことが記されている。ここで述べられている炎暑の時期の珍物の雪は、鎌倉幕府の御家人支配の小道具として、頒雪の行事などに用いられていた可能性がある。しかし、60年後の建長3年の記述⁴⁸⁾は「かれこれ民庶の煩い休する無しを以て、これを止めらる。善政の隋一と云々。（彼是以無民庶之煩休被止之。善政随一

云々。）」と続き、貢氷を担う民の負担を減らすためにこの行事を中止したとある。時代は執権北条時頼の頃で、将軍家が形骸化し御家人との関係も希薄化していたことも、この富士山の貢雪中止の背景にあるようだ。

金沢の氷室の日によく催されたという謡曲の『氷室』⁵¹⁾は、丹波の氷室に立ち寄った亀山院の臣下に対して氷室守の翁が由来を語る内容だが、その中で「深冬の雪を集め置き、霜の翁の年々に、氷室の御調まもるなり」とか「夫れ仙家に紫雪紅雪とて雪の葉あり、翁もかくのごととして、氷を供御に備へしより」「集むる雪の氷室山」とあるように、「供御の水」を守る「雪」のイメージが表現されている。武家文化として発達してきた謡曲・能は、江戸時代には徳川将軍家や加賀前田家を始めとして、藩主が率先して催しなどを執り行う素養のひとつに数えられるようになる。

上述の『年中行事抄』⁵⁰⁾、『吾妻鏡』⁴⁸⁾、『氷室』⁵¹⁾からは、公家の氷と武家の雪という区別が鎌倉時代以降に認識としてあったのではないかと仮説が浮かび上がる。

【徳川将軍家の貢氷雪と頒氷】 慶長11年(1606)六月朔日に(前大樹=前の征夷大將軍)徳川家康が伏見城で伊吹山の氷を貢氷され、群臣に頒氷するとともに、朝廷にも氷献上したことが、公家舟橋秀賢の日記『慶長日件祿』⁵²⁾にみえる。以後、徳川家康の駿府における六月朔日行事として慶長17、19年にも富士山の氷を群臣に給している⁵³⁾。戦国時代を勝ち残ってきた東海地方の雄である徳川家康にしてみれば、一族の権力基盤を確固としたものにするため、臣下の結束を固めるための小道具として、鎌倉時代の宮中や武家において見られた献氷・分氷⁵⁰⁾や貢雪⁴⁸⁾の行事を参考にした可能性がある。(表3)

表3 幕府の氷(雪)献上関連記事の年表

年代	資料名	雪氷の区別	記 事
建久2年(1191)	吾妻鏡 ⁴⁸⁾	山辺の雪	二月十七日丙申 雪降、積地五寸(中略)取六邊香、納長櫃被送遣堅者坊、彼屬山陰、日脚相隔。仍擣氷室、可消炎暑之由、被仰。以此次、當參諸人、運送白雪(云云)
建長3年(1251)	吾妻鏡 ⁴⁸⁾	富士山の雪	六月五日(中略)當炎暑節者、召寄富士山之雪。所為備珍物也。彼是以無民庶之煩休被止之。善政随一云々。
慶長11年(1606)	慶長日件祿 ⁵²⁾	伊吹山の氷	六月朔日 戊戌、齋了、伏見へ行、巳刻、前大樹御対面、從濃州伊吹山、氷令進上、於御前各賜之、今朝禁中へ御進上云々
慶長17年(1612)	徳川実記 ⁵³⁾	富士山の氷	六月朔日 當賀例のごとし。駿城又おなじ。大御所より出仕の輩に富士山の砂(氷)を頒賜せらる。
慶長19年(1614)	徳川実記 ⁵³⁾	富士の氷	六月朔日 當賀例のごとし。駿城にては出仕の群臣富士の氷を給ふ。
明暦元年(1655)	徳川実記 ⁵⁴⁾	富士山の雪	六月朔日(略)今朝駿河の富士山の雪を貢す。又紀邸より氷餅に酒一荷をそへて献ぜられしに、氷餅は速に御饌に供せられ、近習の輩にも頒賜せられ。
明暦3年(1657)	徳川実記 ⁵⁴⁾	(富士山の)雪	六月朔日拝賀例のごとし。井上筑後守政重より例のごとく雪をたてまつり。紀尾両邸より氷餅を献ず。
万治元年(1658)	徳川実記 ⁵⁴⁾	(富士山の)雪	六月朔日拝賀例のごとし。(中略)井上筑後守政重より例のごとく雪を貢す。
寛政11年(1799)	ひとつもと草 ³⁸⁾	(藩邸の)雪	加賀の国の守なん、かならず水無月のついたちに、公に奉れることなれり、(略)本郷てふ館の(略)雪をば公に奉れる料と定め(略)水無月のつるたちの日、いそぎ公に奉れる(後略)
天保元年(1830)	難波江 ⁴⁶⁾	氷(雪)	毎年六月朔日加賀候より氷献上のよし人みないふ事也。(後略:富士の氷を駿府を経て江戸に運んだ記載の引用あり)
天保9年(1838)	東都歳時記 ³⁾	氷(雪)	六月朔日 氷室御祝儀賜水の節 加州候御藩邸に氷室ありて今日氷献上あり。町家にても旧年寒水を以て製したる餅を食してこれに比らふ。

その後、徳川幕府の六月朔日における雪氷の関連する記述⁵⁴⁾は、四代將軍家綱の頃の明暦元年（1655）に「富士山の雪を貢す」とあり、明暦3年（1657）および萬治元年（1658）にも大目付（軍事色の強い道中奉行役も兼務）井上筑後守政重より「例のごとく雪を貢す」とある。これは、鎌倉幕府の富士山の貢雪にならった形となる。なお、和泉ら¹⁰⁾によって、江戸時代の全国各藩での6月朔日の雪や氷にかかわる行事の事例が調査されている。ここでは、雪や氷の利用は地域特性に依存しているようである。

明治時代に編纂された『徳川礼典録』⁵⁵⁾に、江戸時代の徳川家の氷室の御祝儀に関連して「一 吹上御庭氷室之氷御三家方へ急度（表向に而は無之事）被遣旨被御出候ニ付、御三家休息所へ御側衆相越申達之、但御品ハ御同朋頭持出之。一 老中若年寄之吹上氷室之氷被下段、御側衆申聞頂戴之、何も御礼申上之。一 老中若年寄へ氷餅下之（御側衆始奥向之面々へも被下之）」とあるように、吹上の御庭に氷室が設けられ、六月朔日には御三家へ氷を分配することが行われていた。これは、富士の貢雪・貢氷の記述が見られなくなった後に、江戸時代を通じて行われていた江戸城での氷を用いる行事だと思われる。この御三家に対する分氷は、「表向に而は無之事」と内密のこととなっていた。「公家の氷と武家の雪」仮説から解釈すれば、朝廷をおもんばかってのことになる。また、この六月朔日の行事では、臣下には氷の代わりに氷餅を頒下している。中島⁹⁾や川村⁴⁹⁾によると、幕府への大名からの献上品が記載された各時代の『武鑑』に、氷餅の献上が御三家を始めとして、東北信州の大名から多く認められる。信州の諏訪高島藩の氷餅のように、冷え込みの強い地域の気候を利用して外見が白雪のような氷餅が製され¹⁵⁾、献上されていた。これも武家の雪という区別のこだわりを示す例証かもしれない。

[加賀藩の氷（雪）献上の意味] 中島⁹⁾によると、18世紀以降に富士山の貢氷雪記事が見られなくなる原因は宝永4年（1707）の富士山噴火のためであるとし、加賀藩の雪献上につながったのではないかと仮説を述べられている。『東都歳時記』³⁾の記述に、加賀藩邸の移設前に本郷にあり後に駒込に移った富士権現社には、小高い丘があってこれを江戸庶民は富士山と見做して参詣し、六月朔日の富士参りとしていたとある。『東京年中行事』⁴²⁾には、本郷加賀藩邸にある富士山の形をした山の中に囲ってあった雪を献上した、との記述もある。このことは、加賀藩の雪献上と富士山との関連の深さを窺わせる。ところで、時代は下るが地元金沢の雪献上に触れた文献には、日本三霊山の一つである白山の雪を献上したとするものもある¹⁸⁾、²²⁾。かつて、金沢では氷室の日の民間の祝いの氷を「氷々、雪の氷、白山氷」と、富山では「立山水」と呼んで売り歩いていた²⁰⁾。富士山を初めとする霊山の雪といったイメージは、加賀藩の（金沢から運んだとすれば）雪を献上する上での意味づけや名目を考察する際に、検討に値すると思われる。

江戸城吹上の庭の氷室⁵⁵⁾の設置年代は不明ではあるが、明暦大火（1657）で御三家の屋敷が吹上から退去した時期以降のことであろう。加賀藩の金沢城内に氷室が設けられるのは、元禄5年（1692）とされる²⁾、³²⁾が、金沢城の氷室設置が、江戸城の氷室設置に影響を受けて行われた可能性も排除できない。また、富士山の雪（武家の雪）という鎌倉幕府における貢雪行事に関連して、御三家に次ぐ家格の外様大名としての加賀藩が將軍家に雪を率先して献上することの意味は、徳川封建体制の安定を考える上で大変好ましいことであったに違いない（もっとも川村氏（私信）⁴⁹⁾が指摘している事であるが、『武鑑』に記されている各大名の献上品に

ついて、他藩の氷餅の献上の記載はあるが、加賀藩には雪献上の記載がないのは不思議である。一般の献上品とは性格が異なるということなのだろうか)。しかし一方で、加賀藩としての幕府への雪献上は、「武家の雪」の意味からは幕府に対するあからさまな臣従や媚びを意味することなので、地元金沢の臣下や民衆に誇れる事ではなく、あまり周知されていなかったのではなかろうか。地元金沢での氷（雪）献上の関連記事が藩政文書で見つからず、その言及が記事として大正期以降にやっと現れるのは、ひとつにはこのような事情を反映しているのかも知れない。

6. 雪運搬の技術的視点と加賀様の隠し道

[雪運搬の技術的視点] 金沢から江戸へ雪を六月朔日の氷（雪）献上に間に合うように運搬したとして、どのように運んだかという技術的観点からの研究は少ない。竹井⁸⁾の検証実験より、空気に極力触れないように工夫すれば、夏でも雪氷の融解速度がかなり抑えられることが分かっている。大正期以降のいくつかの文書で伝えられる運搬方法のように⁶⁾、¹¹⁾、雪を枯れ葉や熊笹でくるみムシロを巻いた上で桐の二重長持ちに入れて、屈強な脚夫に担がせて、昼夜を分かたず運ばせれば、通常の整備された街道を經由して4日程度でも運搬可能であったと思われる。金沢から江戸に向かう整備された街道とは、金沢から日本海沿岸を高田まで進み、長野-小諸-軽井沢-高崎-板橋のように内陸を南下して中仙道を經由する百二十里の下街道と呼ぶルートである¹⁸⁾、¹⁹⁾、²⁴⁾。

万治2年（1659）に加賀藩で整備された飛脚制度を利用すると、金沢-江戸間を夏場は早飛脚で60時間、荷物飛脚で84時間を要した⁵⁶⁾。こういった民間の飛脚制度が整備される以前に加賀藩の運搬を担ったのは、通信運搬事務は早道飛脚足軽であり、貨物輸送は手木足軽であった⁵⁷⁾。手木足軽は、棒きれを手に城攻めなどの時の足場作りが本来の役割とされるが、加賀藩では荷物運搬を担ったり、金沢城の玉泉院の露地（庭）に氷室が造られたときには露地および氷室の担当となっている。雪献上に係わる運搬はこの手木足軽が担当していた²⁾、⁶⁾、¹¹⁾。

下街道は、概ね高崎から長野、上越を經由して金沢に向かって建設中の北陸新幹線のルートに相当する。新幹線のルートにしては、金沢から見ると長野から上越へ大きく迂回しているように見えるが、北アルプスの存在が江戸時代も現代でも交通の大きな地理的制約になっていることがわかる。もし藩政期に雪氷運搬を考えたならば、もっと短縮された道筋も検討されたはずである。

[加賀様の隠し道] 雪献上の金沢-江戸のルートを考える上で、柳田国男の「加賀様の隠し道」⁵⁸⁾の論考が興味深い内容を含んでいる。柳田によると、信州地方に加賀様の隠し道の伝承があったそうで、江戸に滞在している殿様がなにか起こったときに急いで国元に戻るため、そのルート上に立ち寄り拠点を密かに設けていたという。柳田は、江戸から十国峠を抜け、望月を介して大町に至るルートを論考し、さらに、大町からは北アルプス越えて針ノ木峠を通過して藩領に抜け出るとした。このことを踏まえて、氷（雪）献上を扱った雑誌記事⁵⁹⁾では、北アルプス越えの後、五箇山から塩硝の道を通り金沢に至るルートを提案している。

六月朔日の祝いの氷が倉谷から金沢城に運ばれていたこともあり、地元金沢では倉谷の雪を江戸に運んだとする記述²⁰⁾、²¹⁾、²⁴⁾が多い。ここでは、倉谷を出発点とした観点から加賀様の

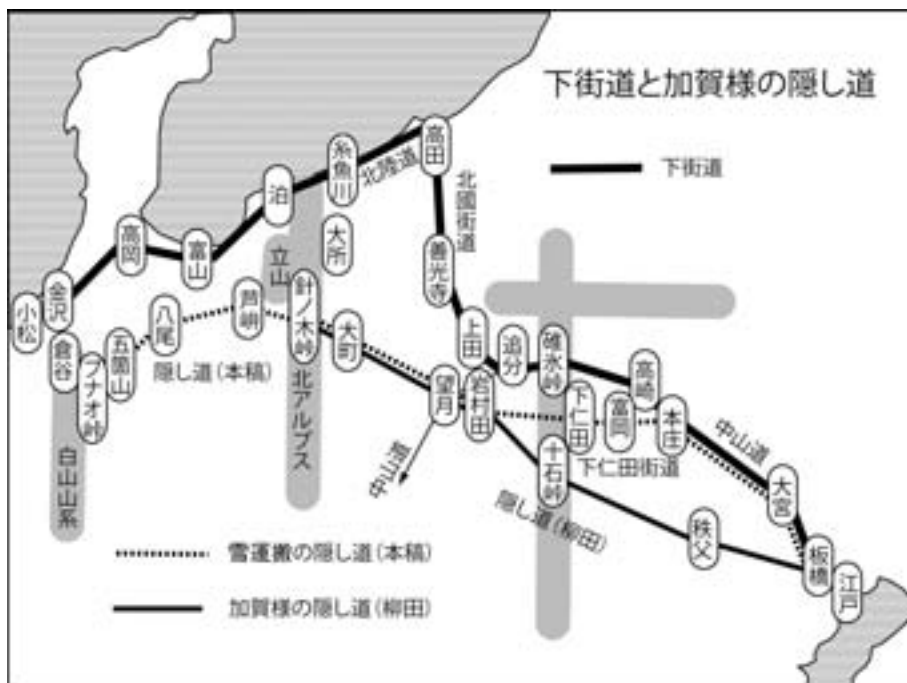


図1 下街道と加賀様の隠し道。三代藩主利常の時代に模索されたと考えられる加賀様の隠し道を、柳田国男（およびラバン）案と本稿案を下街道（北陸道、北国街道、中山道）と比較して示した。氷（雪）献上のための雪運搬ルートとして用いられた可能性がある。

隠し道のルートを、雪献上の金沢-江戸ルートの可能性のひとつとして考察する。（図1）

まず、倉谷から山越えて刀利谷の塩硝の道（加賀藩機密の道）⁶⁰を辿りブナオ峠を越えて五箇山に至り、五箇山-八尾-芦峠-ざら峠-黒部川-針ノ木峠-大町に出るルートである。大町まで出れば、信濃の道を大町-望月と進む。それ以降は、柳田の提案した十国峠を通る険しい山道とは異なるが、下仁田街道⁶¹を通り上州七日市藩富岡を経て中山道に出た後、江戸に向かうルートを提案したい。下仁田街道は中山道の脇往還として開かれた街道で、利便性が追求された為険しい道避けてルートが取られ、物資輸送によく用いられたという。雪の輸送という観点からは、加賀前田家が親戚として少なからず援助していた上州七日市藩⁵⁷を通過する際に、様々な便宜が期待できたと思われる。

[利常の行動と針ノ木峠ルート] 上述の隠し道のルート設定に関連して、利常の興味深い行動がある。正保2年（1645）に四代光高が夭逝し、幼い五代綱紀が江戸に留め置かれる事態にあった慶安元年（1648）五月下旬の事である。利常が江戸から隠居城の小松に戻るときに、日光に寄った後、信濃田中で行列を本道（下街道）を経由する者とそれ以外の者に分けている。利常自身は本道以外のルートをとって、白馬飯田付近を経由して姫川に沿って下り、越中越後国境山間部の大所村周辺に留まってから青梅を経て小松へ帰参したとある⁶²。その直後の六月十三日には岡田助三郎、大嶋（橋）甚兵衛、金森長右衛門などに黒部川奥地（佐々成政のさらさら越えの故事にも関連）の調査が命じられ、立山山麓の芦峠村の三左衛門・十三郎親子の協力を得て七月に実施されている⁶³⁻⁶⁶。この調査は、針ノ木峠越えのルートが記載された延宝六年（1678）の延宝国絵図（金沢市立玉川図書館蔵）の作成につながる⁶⁴。延宝五年（1677）

には、芦峯村の十三郎など三人の奥山廻役がざら峠越えの道筋（針ノ木峠）を通過して信濃に入り、飛騨を経て戻っている⁶⁴。注目すべきは、この三人の奥山廻役の中に倉谷を担当する吉野村の喜左衛門が含まれていることである。倉谷から針ノ木峠を抜けて信濃に抜けるルートが、藩レベルで遅くとも延宝5年（1677）までには確立していたことを意味する。

この越中と信濃を結ぶルートについては、佐々成政のさらさら越え伝説の比定ルートの一つとして有名であり、『御夜話集』にあるように利常も関心を寄せていたものである⁶⁵。江戸時代にこの道は、立山禅定登山を希望する信濃側信徒が夏期に芦峯寺に来る道として利用していたが、正徳元年（1711）六月の芦峯寺と岩峯寺の間に起こった信濃側信徒拘束事件を契機に通行規制されるようになる⁶⁴。明治時代には、明治11年（1878）に荷物運搬用の民間の有料道路である信越連帯新道（針ノ木新道、立山新道などと呼ばれた）がこのルートに造られるが、冬期間の破損が甚だしく、12、13年の2シーズン運用の後で明治15年には廃道になったという歴史もある^{67）}⁶⁸。この針ノ木峠のルートは、夏期の越中と信濃を結ぶ魅力的な短縮ルートであったことがわかる。

山岳地を含むこのルートでは、山の民としての倉谷村や芦峯村の住人がその技能や山の民同士の連携をもってその運用に一定の役割を果たしたと思われる。山岳地を通る難点はあるが、距離の短縮による利点が、江戸時代初期の不安定な時代に加賀藩にとっては軍事目的も含めて隠し道として検討するに値したと思われる。しかし、時代が安定に向かうと、幕府の注目を招きかねない危険を冒してまで積極的に利用することはなかったと思われる。このルートが使われたという証拠はないが、氷（雪）献上の雪運搬に使われたとすれば、藩の機密事項になるので民間には伏せられた事柄であったはずである。このような事情も、金沢で氷（雪）献上に係わる事柄が藩政期の文書に現れてこない理由のひとつなのかもしれない。

7. まとめ

金沢の7月1日における氷室の日の風習と、将軍家への加賀藩の氷（雪）献上との関係が地元金沢の視点から論じられた。旧暦六月朔日の氷室の朔日の諸行事に由来する金沢の風習は、古くは朝廷の氷室の貢氷にたどる藩主への祝いの氷の行事に関連するものと、東北・北陸・山陰などで行われた「ハガタメ」の風習に関連するものの二通りが認められる。金沢の風習と将軍家への氷献上との関連性は、明確には確認できない。加賀藩の将軍家への氷（雪）献上に関する記述が地元金沢で文献に現れるのは、大正期以降である。

加賀藩の藩主への祝いの氷行事に関する倉谷四ヶ村の氷運搬について論じられた。山の民の集落としての倉谷四ヶ村の加賀藩における特殊な役割や位置づけが考察された。加賀藩が江戸藩邸に設けた氷室は、六月朔日の藩主の祝いの氷の行事を江戸で行うために設けられたものと考えられ、後には加賀藩の江戸における一般的な雪氷利用にも供された。また、将軍家に対する加賀藩の氷（雪）献上の意味について、鎌倉時代に遡る「公家の氷と武家の雪」仮説のもとに論じられた。加賀藩の藩政史料などに氷献上に関する記述が確認できないのは、①雪献上が将軍家へのあからさまな臣従を意味すること、②雪献上のための雪運搬が藩機密の隠し道を利用した可能性があることなどから、内容が微妙過ぎて地元金沢では一般に周知されなかったためと考えられる。

謝 辞

奈良市在住の川村和正氏には、中世寺社史料および近世の献水・氷餅関係の史料について多くのご教示をいただきました。また、(独)防災科学技術研究所雪氷防災研究センターの小林俊市氏には、氷献上関係の雑誌資料⁵⁹⁾を提供いただきました。記して感謝します。

参考文献

- 1) 金沢市史編纂委員会、『金沢市史資料編14民俗』, 平成13年(2001)(p.310-311)。
- 2) 森田平次『金沢古蹟志』上, 日置謙校訂, 歴史図書社, 昭和51年(p.222-224)。(底本明治24年, 金澤古蹟志巻四, 「玉泉院丸氷室 此の氷室は, 舊藩中は藩侯の召し上がる々氷雪を貯ふる室にて, 玉泉院丸の築山の麓に, 二間に四間許の穴蔵を造り, 戸室石にて積み立てたり。右氷室は手木足輕の主附にて, 毎歳嚴寒の頃清潔なる積雪を箱詰めになし, 此の室に納め, 夥多の雪を集め箱の廻りを詰め置き, 六月朔日に取出し指上ぐる例なりしと云ふ(後略)」)。
- 3) 齊藤月岑, 『東都歳時記』, 天保九年(1838)刊:(朝倉治彦校注, 東洋文庫177『東都歳時記2』初版10刷, 平凡社, (1987) p.74: 「六月朔日 氷室御祝儀(賜氷の節)加州候御藩邸に氷室ありて今日氷献上あり。町家にて, 舊年寒水を以て製したる餅を食してこれに比らふ。)」
- 4) 永島今四郎編『定本江戸城大奥』人物往来社, (1968), (p.50)。(明治25年:朝野新聞に「千代田城大奥」と題して連載されたもの。)
- 5) 『柳多留五十八』(十返舎一九跋, 文化八年(1811)刊):(岡田甫校訂, 『誹風柳多留全集(五)』, 三省堂, 昭和52年(1977) p.46)。
- 6) 天野米作, 『日本に於ける製氷の歴史に就て』, 冷凍, 1巻3号, 25-26, 大正15年(1926)。
- 7) 田口哲也, 『氷の文化史』冷凍食品新聞社, (1994)。
- 8) 竹井巖, 『金沢の氷室と雪氷利用』, 北陸大学紀要, 第28号, 49-62(2004)。
- 9) 中島満, 『お水さまと富士参り』, NHK知るを楽しむ歴史に好奇心(日本放送出版協会), 第二巻第12号, 8-27(2006)。
- 10) 和泉薫, 河島克久, 石坂雅昭, 納口恭明, 『江戸時代における雪氷献上の雪氷・気候学的検討』, 第22回寒地技術シンポジウム, 概要集, 526-530(2006年11月)。
- 11) 日置謙『加能郷土辞彙』北国新聞社, 昭和54年, p.748:(初出は昭和17年(1942))。
- 12) 大友祐子他編『加賀藩料理人舟木伝内編著集』桂書房, (2006):(享保17年(1732)『料理方故実伝略』p.47.安永4年(1775)『五節句集解』p.78)。
- 13) 金子鶴村『鶴村日記』石川県図書館協会, 昭和51年。
- 14) 『昔の十二ヶ月』金沢市玉川図書館「藩政文書を読む会」, 能登印刷出版部, (1999)(p.44):(「昔の十二ヶ月」は, 原本が金沢市玉川図書館「加越能文庫」にあり, 加賀藩士南部祇知氏の献辞があり江戸末期, 内容から慶応4年(1868)以降の作とされる。)
- 15) 日本古典文学大系『日本書紀』上巻, 岩波書店, 昭和42年(pp.413-415)。
- 16) 角川書店編『図説俳句大歳時記』夏(3版), 角川書店, 昭和49年(P.92-93, 100-101, 127-128, 175)。
- 17) 金沢市役所編纂『金沢市紀要』金沢市役所, 大正13年(1924)(p.140)。
- 18) 金沢生菓子屋読本編集『生菓子屋読本』, 金沢生菓子屋専門店会, 昭和45年(p.6, 68):(金沢市立泉野図書館蔵)。
- 19) 井上雪『金沢の風習』北国出版, 昭和53年(p.131)。
- 20) 和田文次郎『金沢叢語』加越能史談會, 大正14年(上p.30-31, 下p.28-29)。
- 21) 和田文次郎編纂『稿本金沢市史』風俗編第一, 石川県金沢市役所, 昭和2年(p.144, 175-176)。
- 22) 鴨居悠『金澤新風景』北国新聞社出版部, 昭和8年(p.134-136):(金沢市立泉野図書館蔵)。
- 23) 長岡博男『郷土の年中行事』石川・文化シリーズ, 北鉄交通社, 昭和29年(p.44-46);長岡博男『加賀能登の生活と民俗』開明堂, 昭和50年(P.248-250)。
- 24) 八田健一『百万石紙芝居』, 『繊維卸通信』編集委員会, 石川県繊維製品卸商連合会, 昭和34年(p.32-35):(石川県立図書館蔵)。
- 25) 今村充夫『加賀能登の年中行事』北国出版社, 昭和52年(p.256):(『金沢市史現代篇下』昭和44年);今村充夫『生きている民俗探訪』第一法規出版, 昭和53年(p.77-79)。
- 26) 金沢大学郷土史研究会『年中行事調査』昭和45年:(石川県立図書館所蔵)。
- 27) 下出積興『石川県の歴史』県史シリーズ17, 山川出版, 昭和45年(付録p.45-46:年中行事)。
- 28) 山崎利一, 千代芳子『金沢味の四季』北国出版社, 昭和46年, p.59。

- 29) 小倉学『日本の民俗17 石川』第一法規, 昭和49年 (p.244-245) : 北国新聞社出版局編集『石川県大百科事典』北国新聞社, 平成5年 (1993) (p.827) : 石川県大百科事典改訂版『書府太郎』北国新聞社, (2004) (p.785-786) .
- 30) 金沢市史編さん委員会『金沢市史(現代編) 続編』金沢市, 平成元年 (1988) (p.1129-1130) .
- 31) 二宮哲雄編『金沢・伝統・アメニティー』御茶の水書房, (1991) (p.335) : (第IV部第13章年中行事と金沢言葉 (島田昌彦)).
- 32) 『改作所舊記』中編, 石川県図書館協会, 昭和14年 (p.48-49, 207-208, 282-283, 303-304, 307) .
- 33) 中村健二『山の民物語 - 医王山西南麓の史・資料集 -, 北国新聞社, 平成6年 (p.300-317 : 倉谷四ヶ村関係, p.336-337 : 寛文十年 (1670) 村高と定免) .
- 34) 『改作所舊記』上編, 石川県図書館協会, 昭和14年 (p.338-339) .
- 35) 森田平治『加賀志徴』下巻, 石川県図書館協会, 昭和12年 (1937) (p.379-383) .
- 36) 『賀藩貨幣録』, 石川県図書館協会, 昭和45年 (p.14-19) .
- 37) 『増補江戸年中行事』鶴屋喜右衛門跋, (石川県立図書館蔵, 文化1年 (1804)) : (『続日本随筆大成別巻民間風俗年中行事上』吉川弘文館, (1983) p.102-103.)
- 38) 太田南甫編『ひとつと草 上巻』寛政11年 (1799) : (森銚三他監修『新燕石十種 第二巻』中央公論社, 昭和56年 (1981) p.373-374.)
- 39) 岡田甫校訂『俳風柳多留全集』三巻, 三省堂, 昭和52年.
- 40) 西原柳雨編『川柳年中行事』春陽堂書店, 昭和63年, p.323-324
- 41) 石井研堂『明治事物起原』東京橋南堂, 明治41年 (1908) (p.389-390) .
- 42) 朝倉治彦『東京年中行事』2 (初版10刷), 平凡社, (1987) (p.40) : (明治44年春陽堂刊「東京年中行事」が底本)。
- 43) 矢田挿雲『江戸から東京へ (1)』中公文庫, 中央公論社, 昭和50年 (p.142-144) : (大正9-12年報知新聞掲載「江戸より東京へ」が底本。)
- 44) 林大介『ヒートポンプ式空調機器開発の歴史 (1)』中部電力技術開発ニュース, No.96, 27-29 (2002) . : (「江戸時代には1773年の加賀藩御納戸日記に、蓄えておいた雪氷を用いて「客殿の冷装」を行ったとの記述があり、これが日本の冷房の始めと考えられます」)。
- 45) 前田育徳会『加賀藩藩政史料』第八編(復刻版), 清文堂, 昭和45年 (p.895-899) .
- 46) 岡本保孝『難波江』六の巻下, 天保元年 (1830) : (日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第11巻, 日本随筆大成刊行会, (1929) p.430)。
- 47) 黒川道祐『日次紀事』貞享二年 (1685) : (谷川健一編, 解題・校訂広瀬千紗子『日本庶民生活史料集成』第二十三巻年中行事, 三一書房, (1981) p.64)。
- 48) 黒板勝美校訂『続国史大系』第5巻, 経済雑誌社, 明治36年 (1905) (p.394 : (吾妻鏡巻41) 建長3年6月5日条) . ; 黒板勝美校訂『続国史大系』第4巻, 経済雑誌社, 明治36年 (1905) (p.465 : (吾妻鏡巻11) 建久2年2月17日条) .
- 49) 川村和正氏私信。中世の公家および寺社文書では4月朔日と6月朔日の献水記事が散見される。六月朔日の(氷)餅の記述は、中世寺社文書にわずかにしか認められないが、近世の『御湯殿上日記』や『徳川実紀』『大名武鑑』には頻繁に認められるようになる。加賀藩の雪献上については、『武鑑』に記載されていない(文化文政期さえ：筆者確認)のは不思議だという。
- 50) 『年中行事抄 巻二』清家文庫, 京都大学付属図書館蔵。
- 51) 謡曲『氷室』(伊藤正義校注「新潮日本古典集成第79回謡曲集」新潮社, (1991) p.139-147., 野々村戒三編『謡曲二百五十番集』赤尾照文堂, 昭和53年, p.68-70)
- 52) 舟橋秀賢『慶長日件録』慶長11年 (1606) 六月朔日 : (正宗敦夫編纂『日本古典全集』慶長日件録, 日本古典全集刊行会, (1939)).
- 53) 『徳川実紀』第1編「台慶院殿御実紀卷19」, (黒板勝美校訂『続国史大系』第9巻, 経済雑誌社, 明治35年 (1904) p.567,641) .
- 54) 『徳川実紀』第3編「嚴有院殿御実紀卷9.13.15」, (黒板勝美校訂『続国史大系』第9巻, 経済雑誌社, 明治35年 (1904) p.145, 229, 269) .
- 55) 徳川黎明会編『徳川礼典録』上巻, 原書房, (1982) (p.181 : 將軍徳川家禮典録巻之六) .
- 56) 田川捷一編著『加能越近世史研究必携』, 北国新聞社, (1997) (p.178) .
- 57) 若林喜三郎監修『石川県の歴史』北国出版, 昭和45年 (1970) (p.182) .
- 58) 『定本柳田国男集』, 第二巻 (新装板), 筑摩書房, 昭和55年 (1980) (p.239-242) .
- 59) ラパン編集部『ニッポンのアイスロードを探る “お氷さまのお通りでござる”』ラパン, 第3巻第2号, 52-55 (1999) .
- 60) 塩硝の道検証委員会編『加賀藩塩硝をたどる歴史の道』金沢市崎浦公民館, (2001) (p.91-108) .
- 61) みわ明『県別全国古街道事典 東日本編』平文社, (2003) (p.75) .
- 62) 前田育徳会, 『加賀藩史料』第三篇(復刻版), 清文堂, 昭和45年 (p.271-275) .
- 63) 山口隆治『加賀藩林野制度の研究』, 法政大学出版局, (2003) (p.185-193) .
- 64) 福江充『近世立山信仰の展開 - 加賀藩芦峯寺衆徒の旦那場形成と配札 -』近世史研究叢書7, 岩田

- 書店, (2002) (p.192-199) .
- 65) 『御夜話集』上編復刻, 石川県図書館協会, 昭和47年: (『微妙公御夜話異本上巻』 p.215, 『拾纂名言集上巻』 p.284)。
 - 66) 森田柿園『越中志徴』復刻版(上下巻合本), 石川県図書館協会, 昭和48年 (p.610) .
 - 67) 広瀬誠編『郷土史事典 富山県』昌平社, (1980) (p.182-183) .
 - 68) 大町市文化財センター『月刊大町市の文化財[㊤]』広報おおまち, No.910,平成22年(2010), (p.11) .